ミハイル・プレトニョフ

ラフマニノフ ピアノ協奏曲全曲演奏会

Mikhail Pletnev

Rachmaninov The Complete Piano Concertos

高関 健（指揮）

Ken Takaseki, Conductor

東京フィルハーモニー交響楽団（管弦楽）

Tokyo Philharmonic Orchestra

<第一夜> 2023年9月13日(水) 19時開演

7:00p.m., Wednesday, September 13, 2023

<第二夜> 2023年9月21日(木) 19時開演

7:00p.m., Thursday, September 21, 2023

東京オペラシティ コンサートホール

Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

共催：公益財団法人 東京オペラシティ文化財団

協力：KAWAI ／ 東京フィルハーモニー交響楽団

Program

<第一夜> 2023年9月13日(水)19時開演

ラフマニノフ:
S. Rachmaninov:

ピアノ協奏曲第1番 嬰ヘ短調 Op.1
Piano Concerto No.1 in F-sharp minor, Op. 1

第1楽章：ヴィヴァーチェ	1st Mov.: Vivace
第2楽章：アンダンテ	2nd Mov.: Andante
第3楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ	3rd Mov.: Allegro vivace

＊　＊　＊

ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 Op.18
Piano Concerto No.2 in C minor, Op. 18

第1楽章：モデラート	1st Mov.: Moderato
第2楽章：アダージョ・ソステヌート	2nd Mov.: Adagio sostenuto
第3楽章：アレグロ・スケルツァンド	3rd Mov.: Allegro scherzando

<第二夜> 2023年9月21日(木)19時開演

ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 Op.30
Piano Concerto No.3 in D minor, Op.30

第1楽章：アレグロ・マ・ノン・タント	1st Mov.: Allegro ma non tanto
第2楽章：「間奏曲」アダージョ	2nd Mov.: Intermezzo. Adagio
第3楽章：アラ・ブレーヴェ	3rd Mov.: Alla breve

＊　＊　＊

ピアノ協奏曲第4番 ト短調 Op.40
Piano Concerto No.4 in G minor, Op.40

第1楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ	1st Mov.: Allegro vivace
第2楽章：ラルゴ	2nd Mov.: Largo
第3楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ	3rd Mov.: Allegro vivace

パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43
Rhapsody on a Theme of Paganini, Op.43

当初の予定から曲目、曲順の変更があります。

Profile

ミハイル・プレトニョフ(ピアノ)
Mikhail Pletnev (Piano)

その幅広い活動により、一言では説明できない多才な芸術家。ピアニストとして世界の頂点を極め、指揮者や作曲家としても魔法のような驚くべき才能で、世界中の聴衆を魅了している。1990年ロシア・ナショナル管弦楽団(RNO)を設立。創設者・芸術監督として世界有数のオーケストラに育て上げる。2015年4月より東京フィルハーモニー交響楽団特別客演指揮者に就任。

1957年ロシアのアルハンゲリスク生まれ。13歳で中央音楽院、1974年モスクワ音楽院に入学。ヤコフ・フリエール、レフ・ヴラセンコに師事。1978年、わずか21歳でチャイコフスキー国際コンクールのゴールド・メダル及び第1位を獲得。国際的な脚光を浴び、1988年には当時の大統領ゴルバチョフに招かれ、ワシントンのサミットで演奏した。

驚くべき技巧、深い知性に裏づけられた演奏、完璧にコントロールされた美しい音色で、カリスマ的人気を誇る現代最高のピアニストの一人として活躍。しかし、2006年、突然ピアニスト活動を停止し、世界を驚かせた。SHIGERU KAWAIピアノとの出会いにより、2013年よりピアニストとしての活動を再開。以前にも増してすばらしい演奏が話題となっている。

ソリストとしてこれまでに、ハイティンク、シャイー、ジュリーニ、ザンデルリンク、ケント・ナガノ、ゲルギエフ、ネーメ・ヤルヴィ、ドホナーニ、ブロムシュテット、マゼール、ティーレマン、ガッティ、スラットキン、アシュケナージ他の指揮のもと、クリーブランド管、サンフランシスコ響、バイエルン放送響、チェコ・フィル、フィルハーモニア管、イスラエル・フィル、サンタ・チェチーリア管等と共演。アバド指揮／ベルリン・フィルと共演した1997年のジルヴェスター・コンサート及び2000年のヨーロッパ・コンサートは、世界中にTV・ラジオ放送されている。

数多くのCDが発売され、スカルラッティの鍵盤ソナタ(ヴァージン・クラシックス)は、1996年グラモフォン賞を受賞。BBCミュージック・マガジンは、“最高のピアノ演奏”と評した。ドイツ・グラモフォンから発売されたショパンのリサイタルCDについて、著名な評論家ヨアヒム・カイザーは「今年の1枚」であると書いている。また、CD「ラフマニノフへのオマージュ」は、ルツェルン近郊のラフマニノフの家で作曲家自身が愛用したスタインウェイで録音されたが、この模様は「セルゲイ・ラフマニノフ—メモリーズ」(NVCアーツ)というドキュメンタリーに収録されている。他にも、ベートーヴェンのピアノ協奏曲全5曲(ドイツ・グラモフォン)、C.P.E.バッハの鍵盤ソナタ、グリーグ、リストの録音等がある。

作曲家としては、「ClassicalSymphony」、ジャズ組曲、ヴィオラ協奏曲ほか数多くの作品を発表し、近年ではスティーヴン・イッサーリスのために書いたチェロ・ソナタが大成功を収めている。

2022年新たなオーケストラ、ラフマニノフ国際管弦楽団(RIO)を創設した。

Biography

Profile

高関 健（指揮）
Ken Takaseki, Conductor

© K.Miura

サンクトペテルブルグ・フィル定期演奏会で聴衆や楽員から大絶賛を受けるなど海外への客演も多く、マイスキー、パールマン、クレーメル、ブーレーズ等の世界的ソリストや作曲家、特にアルゲリッチからは3回の共演を通じて絶大な信頼を得る、緻密なスコアの分析からスケールの大きな音楽を作りだす名匠。国内主要オーケストラで重職を歴任し、現在東京シティ・フィル常任指揮者、仙台フィル常任指揮者、富士山静岡交響楽団首席指揮者。オペラでも新国立劇場やウラジオストクとサンクトペテルブルグでの團伊玖磨「夕鶴」、大阪カレッジオペラでのブリテン「ピーター・グライムズ」、新国立劇場公演ストラヴィンスキー「夜鳴きうぐいす」とチャイコフスキー「イオランタ」などを指揮、作品の魅力を存分に伝えて高い評価を得ている。1977年カラヤン指揮者コンクールジャパン、1984年ハンス・スワロフスキー国際指揮者コンクール優勝。第4回渡邉曉雄音楽基金音楽賞、第10回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第50回サントリー音楽賞受賞。NHK等の番組にも定期的に出演するなど、幅広い活躍を続けている。

X（twitter）：@KenTakaseki

Biography

東京フィルハーモニー交響楽団
Tokyo Philharmonic Orchestra

1911年創立、日本で最も長い歴史をもつオーケストラ。シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督チョン・ミョンフン、首席指揮者アンドレア・バッティストーニ、特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフ。自主公演の他、新国立劇場他でのオペラ・バレエ演奏、NHK他における放送演奏で高水準の演奏活動を展開。海外公演も積極的に行い、高い注目を集める。1989年よりBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を締結。文京区、千葉市、軽井沢町、長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的、創造的な文化交流を行っている。

Biography

公演によせて

鈴木 淳史（音楽評論家） Atsufumi Suzuki

いまラフマニノフを聴くならプレトニョフ、と言い切ってしまいたい。もっとも色彩的で、最高にエレガントなロマンティシズム。その超絶技巧は折り紙付きだ。しかし、それをあからさまに誇示しないのもプレトニョフの美学。ほかの演奏家なら肩を怒らせバリバリと弾く難所でも、彼はふわりと飛び越えてしまう。柔らかな光を帯びた音色で。しかも、今ここで生まれたような即興性、自由ささえ伴いつつ。まさに、甘美なる桃源郷に迷い込んだ心地だ。そのスタイルは、古い録音で聴くことができるラフマニノフ本人の演奏とも通じ合うものがある。

ラフマニノフの生誕150年を迎える今年。この作曲家ならではの情感が香り立つ音楽の数々が、世界各地で響きわたっているはずだ。そのさなか、東京で2夜にわたってプレトニョフがすべてのピアノ協奏曲を弾くのが、このプロジェクトだ。類い希なるピアニストによって、それぞれの作品の個性も存分に引き出されることだろう。

第一夜は、みずみずしいピアニズムが輝くピアノ協奏曲第1番。陶酔的にしてスケール感ある第2番が演奏される。

第二夜は、ゴージャスなオーケストラ・サウンドの上でピアノの技巧が煌めく第3番に、モダンな装いのなかに成熟したロマンティシズムが華開いた第4番。さらに、この日は、超絶技巧を織り交ぜて目まぐるしく変化していく《パガニーニの主題による狂詩曲》も追加された。

オーケストラは、現在プレトニョフが特別客演指揮者に就き、気心も知れた東京フィルというのも頼もしい。高関健の指揮による密度の濃いアンサンブルが、あでやかな音色を引き出してくれるはずだ。

Program Notes

柿沼 唯（作曲家） Yui Kakinuma

20世紀前半を代表するピアニストとして活躍したセルゲイ・ラフマニノフ（1873-1943）の作品の大部分は、何よりもまず、20世紀前半を代表するヴィルトゥオーゾ・ピアニストだった彼自身のために書かれたものであり、その並はずれた大きな手と超絶的な技巧を発揮させるべく、どれもがピアニスティックな効果に富んでいる。生来のロマンティストであった彼は、聖堂の鐘の音やロシア教会の敬虔な聖歌を愛し、そのメロディーは独特のスラヴ的憂愁を湛えている。チャイコフスキーを尊敬し、20世紀という時代を生きながらもロマン派の語法を貫いたラフマニノフの音楽は、聴き手の心にダイレクトに届き、熱狂させるものであるとともに、その技巧曲の数々は腕に覚えのあるピアニストたちの演奏意欲を刺激してやまない。

ピアノ協奏曲第1番 嬰ヘ短調 Op.1

ラフマニノフは全部で4曲の「ピアノ協奏曲」を残したが、その最初の作品であるこの＜第1番＞は、彼がモスクワ音楽院の学生だった1890～91年に、音楽院の卒業試験のために作曲したものである。この作品でラフマニノフは初めて世に認められ、曲は記念すべき「作品1」として出版された。チャイコフスキーの影響が色濃いながらも作品は好評で迎えられ、ラフマニノフ自身も作曲当初は満足していたというが、のちにラフマニノフはこの曲の徹底的な改作を行った。＜第3番＞の完成から約8年後の1917年に改訂されたその版が、今日知られるものである。曲はラフマニノフらしい豪快なピアニズムこそ控えめながら、メロディの歌わせ方や華麗なピアニズムなどに高い音楽性が感じられる。

第1楽章　ヴィヴァーチェは印象的なファンファーレに始まり、すぐに独特の甘美なメロディが登場する。

第2楽章　アンダンテは、幻想的かつ情緒豊かな緩徐楽章。

第3楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェは、力強い楽想とメランコリックなメロディが対比され、華麗に全曲を閉じる。

ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 Op.18

ラフマニノフの最高傑作として、20世紀に書かれたピアノ協奏曲中屈指の人気を集めるこの＜第2番＞は、1901年、ラフマニノフ28歳の時に書かれた。

ラフマニノフはこの作品を書く直前、24歳の時に発表した＜第1交響曲＞の大変な不評が原因で、強度のノイローゼに陥っていた。このピアノ協奏曲は、そのノイローゼから立ち直った彼が最初に書いた作品であり、それはまた作曲家としてのラフマニノフの名を一躍世界に知らしめる最初の成功作となった。この曲に垣間みられるメランコリックな情緒は、その心の病の余波と呼べるものかも知れない。曲は全3楽章からなり、若きラフマニノフのあふれる情熱をたたえた音楽となっている。

第1楽章　モデラート。鐘のような響きの和音がピアノで力強く打ちならされて始まり、情熱に打ちふるえるような第1主題と、甘美で感傷的なメロディーによる第2主題が登場する。

第2楽章　アダージョ・ソステヌート。ラフマニノフ特有の甘美きわまりない音楽。

第3楽章　アレグロ・スケルツァンド。序奏に続いてピアノによる力強い第1主題が提示されたあと、有名な第2主題がオーボエとヴィオラで歌われる。

ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 Op.30

1907～09年に作曲され、1909年にニューヨークでラフマニノフ自身のピアノで初演されたこの＜第3番＞は、ラフマニノフが「特にアメリカのために作曲した」と語る作品である。この年から翌年にかけてラフマニノフはアメリカで演奏旅行を行い、この協奏曲をマーラーとも共演しているが、この演奏旅行の成功が、8年後のロシア革命の際アメリカに移住するきっかけともなったのだった。

曲は、前作＜第2番＞とよく似た作風がとられているが、書法はいっそう洗練され、ピアノの技巧もより至難なものとなっている。ラフマニノフ特有のロシア的情緒がたっぷりと歌われ、スケールの大きな構成をそなえている点で、＜第2番＞とならぶ傑作と呼べる作品である。

第1楽章　アレグロ・マ・ノン・タントは、全体に暗い情緒が支配的な楽章。

第2楽章　「間奏曲」アダージョは、甘美な歌の音楽。次第に華麗さを増して終楽章へと続く。

第3楽章　アラ・ブレーヴェは、力強い第1主題と抒情的な第2主題によるソナタ形式のフィナーレ。

ピアノ協奏曲第4番 ト短調 Op.40

1917年の革命を逃れてロシアを亡命し、翌1918年からニューヨークを本拠にコンサート・ピアニストとして活躍するようになったラフマニノフは、それ以後、創作活動からはすっかり遠ざかってしまう。故郷を失ったことにより作曲への意欲を持てなくなったためともいわれている。親友のピアニストで作曲家のニコライ・メトネルは、そんなラフマニノフにしきりに作曲を勧めたが、「もう何年もライ麦畑のささやきも白樺のざわめきも聞いていない」と語り、筆は進まなかったという。この＜第4番＞は、そんな時期に書き上げられた数少ない作品の一つであり、1926年にフランスで完成された。作曲技巧の円熟が認められる一方、ひたむきな音楽性はやや影をひそめている。曲はメトネルに献呈された。

第1楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェは、オーケストラとピアノが一体となり、壮大な音楽を紡いでゆく。

第2楽章　ラルゴは、素朴なメロディが繰り返され、昔を懐古するかのようだ。

第3楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェは、強烈な響きに始まり、諧謔的な楽想を中心に、多彩に繰り広げられる。

パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43

＜第4番＞と同様に、亡命後のラフマニノフが作曲した作品の一つであり、「狂詩曲」のタイトルが与えられているが、実際にはピアノ協奏曲と同じジャンルに属するものである。夏の休暇を過ごすためにスイスのルツェルン湖畔に建てた別荘で、1934年の夏に作曲された。主題と24の変奏からなり、その主題はパガニーニの有名な＜無伴奏ヴァイオリンのためのカプリース＞第24番から採られている。この主題はブラームスやリストをはじめ多くの作曲家たちが取り上げているものだが、ラフマニノフはこれをもとに、ピアノの技巧と色彩的なオーケストレーションを駆使し、構成的なアイデアにも富んだ堂々たる変奏曲を書いたのだった。

主題は冒頭に提示されるのではなく、まず短い序奏があり、続いて第1変奏が奏されたあとに軽やかに登場するという、変わった趣向である。また第7、10、24変奏では、ラフマニノフが生涯にわたりこだわり続けた「怒りの日」のメロディが登場する。第18変奏の、全く姿を変えた心揺さぶるメロディは有名で、映画音楽にも使われている。

ARTIST SUPPORT

【アーティストサポート】を通して、
アーティストたちの活動をご支援いただき、ありがとうございます。
時や国を超え「生きる力」を与えてくれる文化・芸術に、
引き続きのご支援をお願い申し上げます。

ご支援をいただいた個人ならびに企業・団体の皆さま

＜2023年度年間サポート＞

F.A　今井良成　S.U　植原由起子　S.U　M.E　A.O　K.O　S.O　河村はるみ　K.K
木村美明　M.K　小室秀夫　新貝康司　N.S　M.S　A.D　土屋涼子　トゥルーラブ真智子
トゥルーラブ真凛　N.N　中島 和　中野和枝　中村尚義　中村美穂　T.H　M.H　藤野盾臣
細沼康子　M.H　松尾芳樹　松田 香　三橋祐太　J.M　H.M　S.Y
TDK株式会社　コンツェルトハウス・ジャパン by 株式会社キタマ
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント　株式会社ロジックアンドエモーション
ライフプラン株式会社　Heart of the Earth株式会社
ナレッジワーカーズインスティテュート株式会社　株式会社RINABO　きづきアセット株式会社
株式会社青林堂　日本パデレフスキ協会淡路

（匿名希望 22名）

＜舘野泉バースデープロジェクト＞

Y.A　阿部将任・登美子　A.I　大谷恵美子　S.O　小畑裕子　M.K　黒川智恵美　黒住彰子
斉藤久子　坂井 和　菅原佳世子　鈴木早苗　中村康江　福島晶子　松田純子　三上美智恵
光永 育　K.M　山家七恵　S.Y　舘野泉ファンクラブ　日本セヴラック協会　有限会社ムジカーザ

（匿名希望 13名）

＜ニュークラシックプロジェクト＞

淺岡尚子　岩井睦雄　上原啓子　小田島容子　K.K　久保千聖　雲然祥子　小池美喜
篠崎啓史　I.S　T.S　トゥルーラブ真智子　トゥルーラブ真凛　T.N　長谷部 宏行　秦 勝重
T.H　林 路郎　細沼康子　牧野佳那　松下泰之（マティビ）　S.Y

（匿名希望 14名）

2023年8月31日現在　敬称略／匿名希望の方は記載しておりません

ご支援についての詳しい内容は、どうぞ下記へお問い合わせください。
株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 Tel.03-3499-7720
（平日11:00～17:00 年末年始を除く）

アーティストサポートの
詳細はこちらを
ご覧ください。